たとえばここに一本の樹があるとします。画家ならその樹を絵に描くし、詩人や作家なら言葉を使って樹を語ろうとする。作曲家は樹をテーマにした歌を作ります。で、写真家は樹を撮影するわけです。写真の画像はカメラとレンズのメカニズムによって、自動的に形成されますから、誰が撮っても同じような樹の写真ができあがりそうでしょう。ところが違うんですね。十人の写真家が撮影すれば、十通りの、たぶんまったくばらばらの樹の写真ができあがってくる。

一人は樹の全体を遠くから写す、別の一人は葉っぱ一枚をクローズアップで、もう一人は高い場所から見降ろす角度で、モノクローム（白黒）のフィルムを使う人もいれば、カラーで撮影する人もいるというわけです。

今私が言っていることは、ごく当然のことだと思われるかもしれませんが、実はここに誤解が多いのです。つまり、普通われわれが写真を見る時は「そこに何が写っているか」が判断できればそれでおしまいです。この写真が桜の樹か、ケヤキの樹か、バオバブの樹かが視覚的な情報としてわかればそれでいい。ところが、十人の写真家がいれば十通りの、百人の写真家がいれば百通りの、桜、ケヤキ、バオバブの樹の写真がある。ということは、そこには単純な視覚的情報だけでなく、写真家の樹の「見方」が写っているということです。やや大げさな言い方をさせていただけば、そこに写真家の世界観が投影されている。

よく写真は選択の芸術だといわれます。どういうことかというと、一枚の写真ができあがるまで、写真家はカメラやフィルムを選ぶことからはじまって、撮影の場所とか、光の状態とか、撮影の角度とか、いわゆるシャッターチャンスを無数の可能性の中から選択していくわけです。シャッターを切ったら、こんどは現像・定着の処理とか、印画紙とか、プリントのやり方とか、やはり無数の選択肢がある。皆さんの目の前にある一枚の写真は、実はそんな複雑きわまりないプロセスを経てできあがったものなのです。もっともぐずぐずしていてはシャッターチャンスを逃してしまいますから、写真家は一瞬のうちにそのプロセス全体を判断する必要があるのですが。

ということは、そうやってできあがってきた写真には、写真家が被写体を「こんなふうに見た」、あるいはもっと積極的に「こんなふうに見てみたい」という選択や判断の積み重ねが写っているということです。つまり写真家と被写体との関係の持ち方ということですね。

注意しなければならないのは、その関係はおおむね意識的なものなのですが、時に写真家が思ってもみなかった、無意識の身構え方とでもいうべきものが写りこんでしまうこともあるということです。このあたりはとても微妙なところで、面白くもありちょっと恐いところでもありますが、写真家が被写体に寄せる思いや感情（愛情とか、嫌悪とか、恐怖とか）が、写真に滲（にじ）み出ているように思えることがよくある。写真を見ていて背筋が寒くなることがよくあります。写真には意識よりも無意識の方がよく写ってしまう。

もしかするとそんな無意識を呼びこんでしまうようなあり方は、写真という表現手段そのものの特質といえるかもしれません。誰だかわからない無名の人物が撮影した一枚の写真に、その時代や場所の歴史や社会構造がありありと写りこんでいることがよくあります。あらゆる写真には、見かけのイメージ以外の「何か」を呼び寄せる可能性があるのかもしれない。別に写真を神秘化するつもりはありませんが、撮影者本人も思ってもみなかったイメージを画面の中に発見するのはよくあることです。

逆にいえば、一枚の写真から、もちろん複数の写真でもいいのですが、そのあたりの微妙な関係の綾や構造を読みとることが、一番スリリングで面白いことでもあります。思わず話がエスカレートしてしまいましたが、要するに写真は写真家と世界との関係の持ち方を、ほかの表現媒体より直接的に（リアルにといってもよい）あらわすことができるユニークな表現手段だということです。